

B 15 平面製図における形態因子 —ズボン原型のくり幅—  
県立新潟女短大 ○平沢和子  
東京大教養 磯田 浩

目的 平面製図によるズボン原型のくり幅は、実験的には腰部矢状径の80%が適切である<sup>1)</sup>。しかしその関係が理論的には説明できなかった。今回はその関係を図学的に証明することを試み、その結果を用いて着装時のくり幅を算定し、計測した。また、スカート原型<sup>2)</sup>に股ぐりの構造を付加すればズボン原型となると仮定し、そのプロセスを形態因子を用いて表わすことを試みる。

方法 1. マルチン式計測器による計測、42項目。2. 腰部横断面および縦断面計10面。3. 被験者青年女子(18~20才、50名)、老年女子(65~75才、50名)。4. 実験期間昭和58年5月~59年6月。

結果 (1) くり幅を腰部矢状径の80%とした青年女子のズボン原型の、着装時のくり幅は100~118%である。(2) 腰部の各矢状径の平均値を比較すると、青年は腰部23.6cm・腰部最大(仮称)24.0cmであり、これはくり幅を考えるレベルではほぼ同じ値とみてよい。老年は中腰部24.3cm・腰部23.1cm・腰部最大26.0cmであった。従ってズボンのくり幅を算出する形態因子としては腰部最大矢状径が適当である。(3) スカート原型からズボン原型に発展させる過程において、平面製図上、股上の計測値と腰部最大矢状径とから股上前後長線を作図するが、この時、計測した股上では小さすぎる結果であった。そこで計測した股上と縦断面図による股上とを照合した結果、計測した股上は縦断面図の股上より平均値で、青年は-0.9cm、老年は-2.8cmと少なかった。股上計測上の問題点として、①老年の椅座位正常姿勢、②箱式計測台、③椅座位姿勢による計測点・計測線のずれ、などが考えられる。

1) 日本家政学会第33回研究発表要旨集B37, P110。2) 家政誌-36, (1985)掲載予定。